

「初めのロウソクの火が尽きました……」

「これで第一の試練は終了ということになります。やや特殊な形となりましたが、試練を続けられることには変わりません。誇っていいですよ？ 信徒くん」

「ええ、ええ……そんなに体を震わせて……ふふふ……♡ あなたの献身や信心深さの賜物なのですから……」

「では、続けて次の試練に入りましょう。次の試練の内容は……」

「聖遺物への献身を示してもらいます。つまり……私のふたなりチンポにご奉仕して、ロウソクが燃え尽きるまでに三回、射精させていただければ合格としますね。信徒の献身な奉仕に祝福を用いて返す。ええ、これも必要な試練なのです。祝福、つまり射精は先ほどの試練でも行いましたよね？」

「ええ、おちんぼの先から精液を出す行為のことですよ。人間の射精であれば、一日に何度も行うことはあまりないと聞のですが……私のおちんぼは神から賜りし特別なもので……キミは安心してご奉仕、してくださいね……ふふふふ♡」

「それでは、ロウソクに火を灯します……開始の合図です」

「……あら？ あらあら、どうしたのですか？ もう試練は始まっているのですよ？ どうしたらいいか、まだ分からないと……なるほど」

「では、先ほどの試練のことを少し思い出しながら、キミにやれることをやってみましょうか？ ふふふ……まずは、私のおちんぼに触ってみてください……」

「んっ……はあ、はあ……先ほどは、私はどんなことをしていましたか？……そうですね♡ 手を使ってシヨシヨしましたよね？ 今度はそれを、信徒くん自身の手で行えばいいですよ……」

「ああ……いい……そう……そう、ですよお……んっ……ああ……片手では、握り込めないのですね……であれば、両手で包み込むようにしながら……シゴくのです」

「んっ……はあ……そうそう……ふふふ♡ ちゃんと、シゴけていますね……♡ キミのその一生懸命にシゴく姿から……んっ♡ はあ……♡ 信仰の深さを感じます……」

「すごく、いい……はあ、はあ、んあっ……♡」

「おちんぼから、伝わってきていますか？ はあ、はあ、はあ……キミにシヨシヨされるだけで……んっ♡ 強く反応してしまっているのですよ……♡ そのまま……もっと、強くシゴくのです……んっあっ♡」

「いっぱい出してと、祈りながら……力を込めて……んっ♡ あっ♡ いいっ♡ いいですよおっ♡ はあ、はあー……あ、んあ……ふぁっ……んっ、んあっ」

「はあ、はあっ、気持ちいい、気持ちいいですんっ♡ 神からの愛が登ってきちゃいますうっ！ イく、んあっ♡ ふたなりチンポで、キミ自身の顔に塗りつけながら……♡ 祝福ザーメンいっぱいぶちまけてあげますねっ♡♡♡……!!」

「んんっ！ あっ♡ んんんううっ!!……♡♡♡」

「はあ……はあ……はあ……あぁ♡」

「一回目、ちゃんと出せましたねえ……♡ 偉かったですよ。キミの顔に擦り付けながらの射精だったので、すぐに果ててしまいました♡」

「ですが……」

「まだ一回目ですからね、あと二回……信徒くんは試練をクリアすることができますでしょうか？ さあ、次はどうしましょう？ また手コキですか？ ふふふふ♡」

「一度射精してしまうと……なかなかイキにくくなるものですからね……♡ 信徒くんの頑張りが、もっと必要になるかも、しれません……」

「んっ……はあ、ふう……ふふ……それくらいの刺激では、もう一度射精させることは難しいですねえ……どうしたらいいか……分かりませんか？」

「そうですねえ……であれば、別のところを使ってみるというのはどうでしょう？ おちんぼをシゴくのは、なにも手だけではありません。先ほど信徒くんがやったようなお尻ですることも可能ですし、お口ですることもできるですよ。ふふふふ……♡」

「ではお口する方法を教えてくださいましょうか……♡ とても簡単ですよ？ おちんぼを咥えこんで、吸い付きながらお口の中でシゴくのです。ただ、おちんぼに歯を立てないように気を付けましょうね？」

「だいたい分かりましたか？ ふふふ……♡ では早速やってみましょう。迷っている時間はありませんよ？ こうしている間にもロウソクは燃え続けているのですから……」

「んっ……はあっ♡」

「そうそう、ちゃんと咥えこんで……んっ♪ 吸いながら、お口の中でシゴくのです……はあ……はあ……んう……少し、難しいですか？ ふふふ、大丈夫ですよ……やっっていくうちに慣れていくものですから……キミなりに一生懸命やってみればいいのです」

「それでもダメだったら、私が少しヒントを教えてください……♡」

「はぁ……はぁ……ふう……」

「ふふふ……それくらいでは、まだまだ刺激が足りませんよ？ もっと、深く飲み込むようにして……喉奥くらいまで入れないと、おちんぼを刺激しているとは言えません。そういうふうを意識して、頑張ってみましょうね」

「はぁ……んっ……はぁ……」

「ふー、ふーっ、んっんん……はぁ、はぁ、はぁ。そうですねえ……頑張っているのは伝わってくるのですが、惜しいことにそれくらいでは全然足りないのです」

「……あ、そうだ♡」

「どうでしょう？ おちんぼがもっと感じる事ができるように、私が手伝ってあげることもできますが……試してみますか？ 信徒くん……ふふふ……賢い判断ですねえ……♡ 今のままで間に合いそうにないですから……」

「ではいきますね？」

「「うっ、やって……んんっ♡ もっと、喉奥までっ、おちんぼをつ、飲み込むのですっ♡ ふふふっ♡ 頭を挿んで動かしてあげると、分かりますよねえ？ んんっ♡ さつきよりも、全然っ♡ んあっ♡ 深く飲み込んで、いるでしょう？ あうっ♡ 気持ちいい、ですよ……♡」

「ああっ♡ いいっ♡ いいですよおっ♡ んあっ♡」

「信徒くんの喉奥が、きゅうきゅう締め付けてっ……んんっ♡ おちんぼがとっても刺激されていますっ♡ このままっ♡ 射精するまで、続けますねっ♡ はぁ、はぁ、んんっ♡ いいっ♡ これっ、気持ちいいっ♡ 必死になってお口でふたなりチンポ加えてる表情♡」

「いいですよ。とてもいいですよ……んんっ♡」

「ハー、ハーツ……くうっ、ん、んふう……はぁ、はぁー……あ、んあ♡ ああっ♡ いいですっ♡ このままっ、直接、出しますねえ♡ はぁはぁ、んっ、ああっ♡ お腹の中に、注いであげますっ♡ あうっ♡ 祝福をつ♡ 受け取って♡ くださいっ♡」

「んんっ♡ あうんっ♡ はぁはぁ♡ 出し、ますううっ♡ んんんんんんんんんんんううううっ！！！！♡♡♡♡」

「

「あっ♡ ああっ♡ すげいすげいっ♡ たくさん、出てますよお♡ はあっ、はあっ、んんっ♡」

「キミの胃の中に、直接……祝福が届いていますねえ……♡ よかったですねえ♡ ふふふ♡」

「二回、射精させることができましたね♡ 信徒くん♡ とっても偉いですよ……♡ やはりキミは素質があるのでしょうね……♡ 素直に私の言葉を聞けるのも美德だと誇っています♡」

「ですが……♡」

「ロウソクの方は待ってくれないみたいですねえ……♡」

「残り三分の一、といった感じでしょうか？ 手コキも、お口での奉仕もしましたが……」
「今のペースだときっと間に合わないでしょうねえ……ふふふ♡ さあ……信徒くん……どうしますか？ 次はどうやって、ふたなりチンポを射精させてくれるのでしょうか？♡……ふふ♡ 悩んでいる時間はもうないと思いますが……何も浮かびませんか？」

「違うでしょうか？ 先ほど、アナタもしたことがまだ残っているではないですか？♡」

「そうですね♡ アナルでの奉仕というのがありますね♡」

「アナルであれば、この精根もすべて包み込みながら、シゴくことができますし……♡ とてもいいと思いますよ？ いいですか？ はい……♡ では寝転がってちゃんとアナルが見えるように、自分の手で開くのです……♡」

「ああ……すっごくいいですねえ♡ このまますぐに、入れてさしあげますねえ……♡」

「んんっ♡ ああっ♡ やっぱり、キミのアナルはすごくいい、ですよおっ♡ んん！♡」
「初めて、貫いた、ときよりもっ♡ んんっ♡ 聖根をすんなり受け入れることができ、できていますねえ♡ あっ♡ んんっ♡ それ、なの……♡ はあはあ、締め付けによる刺激は強いまま……♡」

「ふふふ♡ これなら、すぐにでもっ♡ んんっ！♡ 射精することができますよっ♡ 信徒くん♡ んあっ♡ あっ♡ いいっ♡ このアナル、すっごく♡ いいですっ♡」

「ふっ、つふあ、んんっ……はあ、はう……ふー、ふーっ……ズボズボされて、キミも気持ちいいんですね♡ はあはあ、いっばい声出ちゃってますよっ♡」

「ふふふ、ふふふふっ♡ 仕方ないですよね♡ おちんぼで、アナル突かれて、キミの体も反応しちゃうんですよ♡ はあはあ、んんっ♡ さっきよりも楽になったと思いますねか？ ふふふ♡」

「それはあなたの体が、この聖根に慣れてきている証拠なのかもしれませんね……♡ たくさん、精液を浴びて、手でも、お口でも……んんっ♡ いっばいシゴいて、祝福を受けたおかげなのです♡」

「少しずつですが、使徒に近づいている証拠ですよ。よかったですね♡ ふふふ♡
んん♡ はあ、はあん♡」

「んっ、んあっ、はう……あらあら……♡ キミのおちんちゃんも、気持ちよくなっちゃったんですか？ ふふふ♡ アナル、突かれて♡ 勃起しちゃうなんて♡ はあはあ♡ すっごく、素敵ですねぇ♡ んん♡」

「感じちゃったんですねぇ……しよがないですよねぇ♡ ふふふ♡」

「あっ♡ あうっ♡ 締め付けっ、すっごい♡ 信徒くんも、いっぱい突かれて、気持ちよくなってるんですねぇ♡ んっ♡ あんっ♡ 不安や、恐怖といったものは、んっ♡ もう、なくなりましたか？ ふふっ♡ アナルずぼずぼされて、感じちゃってますもんねえ♡ そんな感情、もうないですよ？ ふふっ♡」

「あんっ♡ すっごくいいですよ。もっと鳴いてください♡ 先ほどの試練とは違いますから♡ んんっ♡ いっぱい♡ 喘いじゃってますねぇ♡ んんっ♡」

「とはいっても、さつきも声は我慢できてませんでしたね♡ 最初から、アナルはとても敏感だったんですねぇ♡ 祝福するため♡ ですけど♡ 気持ちよくなっちゃうのは、仕方ないですよ♡」

「誰も聖根には逆らえません♡ ほら、もっと感じてください♡ ああっ♡ いいですよ♡ 素敵ですよ♡ あっ♡ あうっ♡ 締め付けっ♡ 強くなってますっ♡ いいっ♡ いいですよっ♡ アナル、ズボズボするの♡ すっごく、気持ちいいですよ♡ んん♡ あ、んあ♡……フウ、フッ……ん♡ んん♡ ふあっ♡……ふあっ♡……んん……♡」

「はあはあ、んんあっ♡」

「このまま、また……中にいっぱい出してあげますねぇ♡ はあはあ♡ 試練のため♡ 使徒になるため♡ ですからね♡ ああっ♡ もう♡ 出ますっ♡ 信徒くんの中にっ♡ いっぱいっ♡ 出ますうっ♡ きちんご奉仕ができたドスケベ穴にドロドロのせーしで真っ白になるまで祝福してあげます♡♡」

「んんんんんっ……♡ あうっ♡ あああ！♡ んんんああああああああああっ♡……♡♡♡」

「はあ、はあ、んあっ♡ 信徒くんも、一緒に、出しちゃったんですねぇ……んっ♡ ああっ♡ キミのおちんぼから、精液が、びゅっびゅって、出て……私の体に、ベッタリかかっちゃってますよ……ふふふふ♡」

「ああ……こんなにいっぱい出して……ちゆるびっ……んあっ♡ はあ……♡」

「いけない子、ですねぇ……♡」

「まあ、最後のおいたは、仕方ありませんね……♡」

「これで第二の試練も完了です……♡ おめでとございます、信徒くん……♡」